

平成 27 年度情報提供のあった疑い種のうち特定外来生物と同定された種の一覧

日時	種類	市町村	内容
平成 27 年 4 月	アライグマ	西条市	箱罠での捕獲・殺処分
平成 27 年 9 月	〃	四国中央市	写真
平成 27 年 10 月	〃	〃	ロードキル個体
平成 27 年 10 月	〃	〃	箱罠での捕獲・殺処分
平成 27 年 6 月	セアカゴケグモ	松山市	写真
平成 27 年 9 月	〃	松山市	標本
平成 27 年 9 月	〃	西条市	標本
平成 28 年 2 月	〃	四国中央市	標本
平成 28 年 3 月	オオフサモ	宇和島市	写真

平成 27 年度生物多様性再生モデル地区推進事業に係るモデル地区構築事例

生物多様性センター

愛媛県生物多様性センター(以下「センター」)では、平成27年度から3年間、本県特定希少野生動植物コガタノゲンゴロウが生息している県南西部の愛南町の水田地帯において、本種を含む生物多様性保全を目的とした調査・研究を実施している。

しかし、当地域には生物多様性保全を推進する組織が存在せず、地域主導による保全活動推進の見通しが立っていない状況にあった。

そこで、調査・研究と並行して保全活動組織を育成するための取り組みを進めた。

その方法は、組織のリーダー候補者を確保したうえで、センターが実施する調査活動を共同で行うボランティアスタッフを募集し、保全対象予定地域の生物調査を実施する中で地域の保全活動組織への移行を働きかけるというものであった。

これらの取り組みの結果、平成27年12月に地域の保全活動組織が設立されたので、その概要を報告する。

1 対象地域

愛媛県南宇和郡愛南町

2 方法

当組織育成の取り組みは行政主導であるが、自主的な活動ができる組織に育成するため、当センターは、文書発送やスタッフの保険加入手続き、調査用資器材の準備

などの事務的な作業に徹し、現地での調査活動の指導は、リーダー候補者が担うという役割分担とした。

(1) 組織リーダー候補者の確保

組織リーダーは、保全に対する考え方が県の生物多様性保全の考え方と一致している必要があるため、当所が愛南町内の候補者を選定し、平成27年2月から複数回接触を行い、保全活動組織設立の計画を説明した。

(2) ボランティアスタッフの募集

ボランティアスタッフの募集範囲は、地域主導の組織を育成するため愛南町内在住者に限定した。

そして、生物調査の補助や自然観察会運営補助を活動の目的とする旨を明記したボランティアスタッフ募集のチラシを作成し、5月に愛南町役場の広報誌を利用して町内全世帯(約9,800世帯、人口約24,000人)に配布した。

(3) ボランティア活動の推進と地域住民への啓発

7月11日からコガタノゲンゴロウ生息地等の調査を、ボランティアスタッフと合同で開始した。

また、地域住民の生物多様性保全に対する関心を高める目的で、これと並行して6月4日と8月29日に、地域の生物多様性に関する研修会を開催した。

(4) 保全活動組織設立に向けた意向調査

9月上旬には、ボランティア活動から保全活動組織への移行について、スタッフの考えを把握するための意向調査を実施した。

調査票には、組織化によって活動内容等の変化を示した表を添付した(表1)。

10月24日に、上記の調査結果に基づいて保全活動組織の発足に向けて検討し、11月14日には同組織発足後の活動内容の打合せを行った。

表1 ボランティア活動と新しい保全活動組織の比較

項目	ボランティア活動	新しい保全活動組織
運営	生物多様性センター(以下センター)	会員
役員	無し	リーダー候補者他
活動内容	センターが実施する調査を共同で行う	会員の意向を尊重した活動内容とする
構成	愛南町在住者	愛南町在住者を中心とした構成
活動範囲	愛南町旧一本松町	愛南町内
活動期間	センターの調査実施期間(平成27～29年度)	任意
事務作業	センターが行う	会員で行う
運営費	県	自主財源(平成27,28年度は県が一部を助成)
役員	無し	リーダー候補者他

(5) 保全組織会員の募集

保全活動組織の設立を12月19日に設定し、11月18日からボランティアスタッフを含む町内在住者の保全活動組織会員の文書による募集を開始した。

3 取組結果

(1) 組織リーダー候補者の確保

候補者の複数回の訪問の結果、同年6月にリーダーとしてボランティアスタッフを指導していくことに対する了解を得た。

その後、新しく設立された組織の会長に就任した。

(2) ボランティアスタッフの応募状況

6月末時点で16人の応募があり、7月11日から調査活動を開始した。その後、11月末までにボランティアスタッフ数は38人となった。

スタッフの年齢構成と区分は表2の通りであった。

(3) ボランティアスタッフの活動状況

ボランティアによる調査活動は、7月11日から11月14日まで5回実施し、延べ58人の参加があった(表3)。

表2 ボランティアスタッフの年齢構成と区分構成

年齢層	人数(人)	区分	人数(人)
10歳未満	8	保育園児	2
10歳代	9	小学生	10
20歳代	5	中学生	0
30歳代	6	高校生	5
40歳代	5	大学生	5
50歳代	1	保護者	9
60歳代	4	その他	7
計	38	計	38

(4) 保全活動組織設立に向けた意向調査

11月2日の時点で23通の調査票が回収され、その回収率は82%であった。

新しく設立される保全活動組織への加入に関する設問には26件の回答があり(重複回答あり)、「加入したい」との回答が15件あり、「加入したくない」が2件、「検討中」が9件であった(表4)。

「加入したい」理由としては、「生き物・自然が好きだから」と「生き物や自然に関する専門知識を深めたい」がそれぞれ10件と、最も多かった(表5)。

「検討中」と回答した理由としては、仕事などの時間的な制約に関するコメントがあった。

「加入したくない」理由には、「活動内容に不安がある」が1件、「その他」が2件あり、その理由として受験勉強や学校の部活動との両立が難しいとのコメントであった(表6)。

組織の目標設定を問う質問に対しては、「愛南町の水田農業と生物多様性の保全」の選択が9件と最も多かった(表7)。

新しい組織の名称公募には、11の候補が上げられ、後日18人が出席した会議において多数決により、名称は「愛南探検隊」に決定した。

(5) 保全活動組織への加入状況

「愛南探検隊」発足時の12月19日時点の加入者は23人であり、全てボランティアスタッフからの移行であった。

会員の年齢構成と区分は表8の通りであった。

構成で特徴的なことは、小学生とその保護者の加入が目立つことであった。聞き取りによると、親子で一緒に生物多様性や自然を体験したいというニーズからであった。

現在、「愛南探検隊」は月に1回のペースで活動を継続

しており、組織の役員が運営を実施している。また、その活動は、地元高等学校自然科学部の課外活動の一環ともなっている。

4 今後の課題

当センターが実施しているコガタノゲンゴロウの調査を進める中で、地域の水田がその繁殖場所であることが明らかとなり、今後、当保全活動組織が愛南町の水田農業と

生物多様性保全の活動に関わっていくことが想定される。

しかし、組織の中には農業生産者が存在せず、また、生産者との接点が少ない状況にあり、今後組織活動を展開していくには、生産者や関係機関との連携体制を築いていく必要がある。

また、組織設立後の新規加入者が無いが、その原因として組織外部への情報発信力がまだ不十分であることが考えられるため、その強化も課題であると考えられる。

表3 ボランティアスタッフの活動状況

月・日	活動内容	参加人数(人)
7月11日	ため池の生物調査	8
8月9日	ため池の生物調査	14
9月12日	収穫後の水田の生物調査	11
10月24日	収穫後の水田の生物調査	12
11月14日	休耕田(ビオトープ創出予定地)の生物調査	13
計		58

表4 保全活動組織への加入の意向に対する回答

選択肢	回答者数(人)
加入したい	15
加入したくない	2
検討中	9
計	26

※重複回答あり

表5 保全活動組織に加入したい理由についての回答

選択肢(複数回答可)	回答者数(人)
生き物・自然が好きだから	10
調査が面白い	3
現在行っている調査をまとめたい	0
生き物や自然に関する専門知識を深めたい	10
愛南町の自然を守っていききたい	9
その他	0
計	32

表6 保全活動組織に加入したくない理由についての回答

選択肢(複数回答可)	回答者数(人)
県が主催でなくなるので	0
知らない人からの呼びかけが不安	0
新グループの活動内容に不安がある	1
その他	2
計	3

※重複回答あり

表7 保全活動組織の目標設定に対する回答

選択肢(複数回答可)	回答者数(人)
町のイベント等での調査・研究内容の発表	5
町の水田農業と生物多様性の保全	9
町の自然をまとめた図鑑等の作成	5
その他	2
計	21

表8 保全活動組織の年齢構成と区分構成

年齢層	人数(人)	区分	人数(人)
10歳未満	7	保育園児	2
10歳代	5	小学生	6
20歳代	0	中学生	0
30歳代	3	高校生	4
40歳代	4	大学生	0
50歳代	1	保護者	6
60歳代	3	その他	5
計	23	計	23